

シリーズ

## ／ 笛 吹 市 探 訪 ．

第2回

## 境川町大黒坂・小黒坂地区

おおぐろさか こぐろさか



聖応寺反橋



一の沢遺跡出土品

「山と山が連なっていて、どこまでも山ばかりである。この信州の山々の間にある村 向う村のはずれにおりんの家はあった。」で始まる『檀山節歌』を書いたのは、石和町出身の深沢七郎です。彼は、あの小説の地形などはこの大黒坂を舞台にしたと、後年随筆で紹介しています。彼のいここがお嫁にきていて、しばしば訪れ、大黒坂の人々の人情に触れ、大好きになつたよつです。

もともと大黒坂と小黒坂はあわせて黒坂と呼ばれていたと思われ、この黒坂地区が歴史上に登場するのは、聖応寺に残る応永2(1395)年の黒坂信光寄進状です。この聖応寺は臨済宗向嶽寺派の中本山で、安永8(1779)年の火災で多くが焼けたものの、再建された仏殿を始め、周囲には石垣などが残り、最盛期には20ほどの塔頭(たちゅうとう)があったという往時の姿が偲ばれます。また、再建された山門をくぐるとすぐの狐川に架かる反橋(そりばし)は、大月の猿橋と同じ刎橋(はねばし)形式です(写真)。かつて県内にはあちこちに見られたようですが、今はほとんど残っていない貴重な文化財です。

聖応寺は康暦元(1379)年の開創と言われ、もともと小黒坂の寺平地区にあったのが、応永年間に現在の大黒坂の地に移されたと伝えられています。前述の黒

坂信光の子朝臣が住んでいたと推定されているのが、現在の日蓮宗妙見山晴雲寺がある場所です。晴雲寺は地元では、おみょうけんさんと呼ばれて親しまれ、冬至の日には、星祭り」が盛大に行われます。

ところで、小黒坂地区には数多くの遺跡や古墳があります。その代表が一の沢遺跡です。これまで10回の調査が行われ、今から4500年前の縄文時代中期中頃から後期にかけて最盛期を迎えた、大規模な拠点的な集落だったことがわかっています。平成11年にはその出土品176点が、中部高地を代表とする造形美として認められ、国の重要文化財に指定されました(写真)。

「芋の露連山影を正しうす」に代表される俳人飯田蛇笏とその息子龍太の居山廬)があるのも、小黒坂です。飯田蛇笏は自らのすまいを「さんろ」と呼び、その裏山の後山の自然と、そこから見渡す甲府盆地や山々の景観を愛しました。その後山の一つ春日山は山梨百名山に選ばれ、その登り口の黒坂峠には藤袋出身の俳人北野道等(みちら)の句碑があります。本や句集を片手に散策し、文人が愛した自然を散策してみたいかがでしょうか。

今回は春日居地区を紹介します。

笛吹市教育委員会 社会教育課